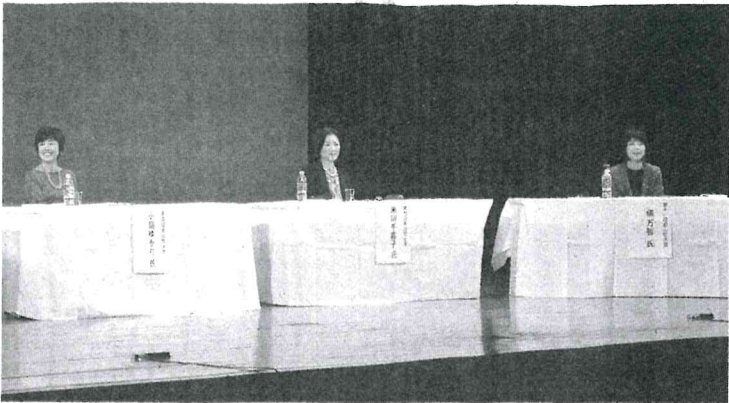


われを恨み罵りしはてに嗾みたる母のくちもとにひとつの齒もな

# 12/11 牧水のふるさと 家族への思い

没後90年記念トークイベント

女性歌人5人が語る 延岡



郷土の歌人、若山牧水の没後90年記念トークイベント「牧水が愛したふるさと」は9日、延岡市であった。女性歌人5人が、牧水にとつての「ふるさと」や「家族」が感じられる歌を選び、それぞれ魅力を語り合った。約600人の参加者は改めて牧水の歌の魅力や業績を確認した。県も延岡市、日向市などへつる若山牧水賞

運営委員会の手催で、第35回国民文化祭・みやまき2020、第20回全国障害者芸術・文化祭みやまき大会のイベントとして開いた。

登壇したのは、歴代の同賞受賞者で第5回の小島ゆかりさん、第8回の栗木京子さん、第9回の米川千嘉子さん、第11回の俵野智さん、第17回の大口玲子さん。5人一緒にステージに並んだ。

「ふるさと」について、小島さんは「母恋しかかる夕べのふるさとの桜咲くらむ山の姿よ」「上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交しつ父と釣りにき」を挙げた。日向市東郷町坪谷の風景や両親を詠んだもので、「ふるさと」は牧水を包み、牧水もふるさとを愛していた。思いがエコーのように響き合っている」と評した。

著書「牧水の恋」を出版した俵さんは「牧水は子煩悩ではあったけど、イクメンではなかった」と持論。早稲田大時代に詠んだ「ふる郷の梨の古樹を撫でて見つをさなきわれと逢ふごちしてを愛ひ」「不変的なものとしてふるさとがあった。牧水を受け止めるふるさとの底力もある」と話した。

米川さんは「われを恨み罵りしはてに嗾みたる母のくちもとにひとつの齒もなき」を選び、「これが母に対する自然な気持ちだろう。」「どうしてを歌えるのは母に対する安心感があったから」と分析。人間の精神の複雑な痛み、他者の痛みや悲しみが染み込んでくるところが牧水の素晴らしさ」と語った。

子育て中の大口さんは、家族について詠んだ「着換すと吾子を襖体に朝床に立たせてしほし撫で讀ふるも」「う歳の旅人（牧水の長男）がただるだけかわい。とてもシンプルで、子育ての原点を見ているよう」と共感した。

栗木さんは「妻や子をかなしむ心われと身をかなしむこころ」ながら「燃ゆ」を選択。妻や子をいとおしく思う心と自分が文学者として成功してこころを、「燃ゆ」といって強い言葉で表現していることに触れ「牧水に何の濁りもなく、そういうところが魅力だ」と話した。

みきさんと柳田啓志さんを招き、後藤洋ピアノ演奏、西垣昌代さんの指揮で、羊毛二子を響かせた。

「ふるさと」は四つあつ、

伊藤一彦さん

同イベントでは同賞選考委員で、若山の第一人者の伊藤一彦さんが講演した。「牧水にとつてのふるさは四つあつて、生まれ育った坪谷、10代の多感な時に文学者としての一歩を踏み出した年の8年間を過ごした沼津、そして、「牧水が旅したところ全部」だと述べ、牧水は初めて出会った人や自然に、かしいと言つて親しみや愛情を持つてう。行く先々で出会った人や土地を全てにしてしまふ、インターナショナル、け隔てがなく、どの人も牧水を大切に」と話した。



講演する伊藤一彦さん



「燃ゆ」を詠んだふるさと  
大会、児童日新聞社、延岡市、日向市